「やさいクラブ」という現代の報徳仕法

＝農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一＝

蔦谷　栄一（つたや　えいいち）

1971年農林中央金庫に入り、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、2013年11月より現職。

本年は国連が定めた国際協同組合年であり、各地で多彩なイベントが開催されているが、静岡県掛川市にある大日本報徳社でも、5月24日に「国際協同組合年と二宮尊徳」をテーマとした記念フォーラムが開かれた。ここで筆者は「生産消費者による都市と農村の融合」と題し、〈基調問題提起〉をさせていただいた。

時代は転換期にあり、食料安全保障の確立はもちろんのこと、自由化・市場化・グローバル化を基本原理とする工業的社会から、生命原理を最優先する農的社会への転換が急がれる。そのポイントの一つは近代文明の象徴である都市化を反転させた農村化、すなわち都市農業を振興し、緑地を拡大して、都市住民も「生産消費者」となって農業に参画し、少しでも自給しながら、流域自給圏づくりを基軸に循環型社会を創造していくことである。

これに大きな示唆を与えているのが二宮思想である。「至誠・勤労・分度・推譲」の教えはよく知られており、これらはまさに人道を示すが、その土台としてあるのが天道である。自然の摂理、自然が与える恵みと、その一方にある天災などの脅威。人間は自然に逆らって生きていくことはできない。自然に沿って生きていくのが人間の道であり、それが尊徳の天道・人道論であるというのが筆者の理解である。この天道・人道論をしっかりと踏まえてこそ循環型社会の創造も可能になる、というのが筆者のスピーチの要旨であった。

フォーラムの第1部の〈基調講演〉と〈基調問題提起〉に続く第2部では、〈各領域における研究・実践報告〉として各地の取り組みが紹介され、いずれも実践的かつ示唆に富む素晴らしい報告が続いた。その中で特に興味・関心をひかれたのが、掛川市で「やさいクラブ」を主宰する中田繁之さん（大日本報徳社参事）の「農的くらしと小学生たちの『やさいクラブ』の実践」なる報告であった。

小中学生から社会人・高齢者までを対象に、耕作放棄地を借用して1家族で2メートル四方の畑を管理し、1年間で2クルー、すなわち4～6月に夏野菜を、9～11月に秋野菜を各3種類、栽培する。そもそもは、これまで教員が担ってきた部活動を地域に移行する「地域クラブ」から生まれた取り組みで、今年3月現在で49あるクラブの一つとして位置付けられており、指導員も配置されている。

「最初は子どもたちに農業の楽しさを伝え、土に親しんでほしいとの思いから始めました。しかし、この活動が現代の諸問題（農業問題や教育問題、耕作放棄地問題など）の解決の糸口になると気付いたのです」と中田さん。そして「荒地にも徳があり（万象具徳）、人の手（人道）によって荒れ地がよみがえったとき、同時に人の心もよみがえります（心田開発）。やさいクラブの活動が、現代の報徳仕法と感じるゆえんです」と語った。

畑仕事に励む子どもたち（大日本報徳社・提供）

登下校時に畑に立ち寄って様子を見たり、ちょっとした作業を行ったりする子どもも多いようだ。「地域でできる『小さなこと』が全国に広がれば、もしかして『変わる』かもしれない」。そんな思いが綿毛となり、現代の報徳仕法の一つとして全国に広がることを期待したい。